

**私**が長年勤務していた「M.D. アンダーソン癌センター」では、ペットの面会が禁止されていました。私は、規則を変えてほしいと病院側に何度も訴え、懇願し続けましたが、返ってくる答はきまって“No!”。残された道は、退院する見込みのない患者さんのためにペットをこっそり持ち込むという手段だけ。主人とペットが再会を喜び、最後の別れを惜しむ手助けをするしかなかったのです。

ある朝、一病棟の婦長から入った連絡によると、28歳になる男性患者の両親が、愛犬のヨークシャーテリアを連れて来て、死期が迫った息子に一目会わせたいと主張して譲らないとのこと。病院の規則を説明しても従わないし、そのことで両親が私に苦情を訴えるかもしれないと言ってきたのです。実際、彼らは私のオフィスにやって来ました。怒ってはいません。ただ悲嘆にくれていました。悲しみに打ちひしがれながら、これから確実に起きるであろう“運命”をまさに受け入れようとしていました。彼らの説明によれば、14年前に仔犬を家に連れ帰って以来、息子とヨーキーは互いに離れられない仲だとか。ひとり息子が第4期のリンパ肉腫で実験的治療を受けるようになって、両親は2か月前から近くのモーターで暮らしているのですが、犬はいったんそこに戻したとのこと。その雌犬も両親と同様に悲しんでいて、体調が良くないとか。彼らは声を荒げることもなく、脅すような口調でもありません。真心を尽して事情を説明するだけで、その心はまさに張り裂けんばかり……話を聞き終わるまでもなく、私は尋ねました——「犬の大きさは？ おとなしくできるかしら？」彼女は体重4ポンド（約1.8kg）で、一度も吠えたことがないとのこと。私たちは“計略”を練りました。間もなく、父親はモーターに帰って、犬を連れて戻り、病院の外で私に渡しました。私はおチビさんに言って聞かせました——「上着の下にじっと隠れててね…吠えちゃだめよ。」彼女は茶色い大きな目で私を見つめ、「わかった。ダイジョーブよ」という風にまばたきをしてみせました。私たちは、人に見られないように、いくつもの廊下を通り抜け、何度かエレベーターに乗り、息子さんの病室に急ぎました。私は両親に指示しました——部屋の戸口に背中をつけて立ち、入室し

ようとする人の視界をさえぎって下さいと。青年は衰弱しきっていました。ベッドを45度の角度に上げて、上体を支えています。左腕には点滴の管とポンプがつけられています。部屋に入ると、私はベッドに寝ている青年の左側にヨーキーを置きました。彼女はうれしさのあまりに体中を震わせ、かすかに喜びの声を上げながら、ご主人の首の所までよじのぼり、顎の下に鼻を埋めました。小さな尻尾をちぎれんばかりに振っています。そのとき、何日間も半昏睡状態に陥っていた青年がそろそろと右手を動かし、やっとのことで胸の上を越えて、左側にいる愛犬にさわり、頭をゆっくり彼女の方に向けました。涙がぼろぼろと頬を伝っています。私も思わず我を忘れました。一生忘れられないシーン……再会の喜びにあふれる感動的場面でした。その瞬間、彼らにとって他に重大なものはこの世に存在しなかったし——私もそうでした。青年と両親の表情、それに、あの驚異的な小さな犬の姿が私の心に焼き付いたまま消えません。私は病室を出る前に両親に言いました——誰かに咎められたら、すぐに私を呼んでくださいと。ふたりが帰るときは、私が犬を車に戻しました。その後、例の婦長のところに立ち寄り、お世話になった礼を述べました。それから、青年の主治医にも連絡を取りました——“好意的はからい”を感じていたからですが、やはり、彼は事情を知りながら、見逃してくれていたのです。

こうして“親友”とともに数時間を過ごした青年は、翌日、元気を取り戻しました。彼と両親は久しぶりに話をかわすことができました。犬も元気を回復しました。3日振りに食欲を示したそうです。私が再び病室を訪れたとき、青年はしっかりと気力を保っており、犬は主人の肩と顎の間に丸まって幸せそうに眠っていました。それまでの病室に見られなかった平和な光景でした。



翌朝早く、夜明け前に、青年は息を引き取りました。両親は立ち去る前、肋骨が折れんばかりに私を強く抱き締め、3人とも泣きました。「一生涯、あなたのためにお祈りします」と両親は私に約束しました。彼らが息子さんと過ごした最後の数日は、数週間のうちで最高のものでした。ゆっくりと別れをかわすことができたのですから……そして、後に私は知りましたが、あの小さなヨーキーも、なんと、同じ日に死んだそうです。愛する主人と同じく、ひっそりと息を引き取りました。彼らは一緒に旅立ったにちがいありません。

数日後、上司からの電話を受けたときのこと、短い用件の後で彼は言いました——「レスリー、犬のこと知ってるよ。」「犬って、どの？」と私。「全部わかってるんだよ。ただし、これからは、前もって知らせてほしい。いつ犬が面会に来るか知っておきたいからね。いいかい？」私は思わず笑顔になって答えました——「はい、そうします」と。上司の言葉は、望み得る最善の“制裁”であり、心からありがたく思いました。

レスリーは、1999年にテキサス大学にあるM.D. アンダーソン癌センターを退職しました。彼女はそこの患者支援会の創立責任者でした。現在彼女は、腎臓病を患う犬のための栄養について色んな人達にアドバイスをしたり、動物とのコミュニケーションについての講座を開いたりしています。彼女の動物に対する愛情が、彼女の飼いだだけでなく数え切れない犬の命を救うユニークな食事療法の発展へとつながりました。